

平成27年度第5回岡山市総合教育会議

日時：平成27年10月26日（月）

場所：岡山市役所本庁舎第3会議室

○司会 それでは、ただいまから平成27年度第5回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、全員の御出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが入室を許可してよろしいでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

○司会 傍聴者の入室を許可します。

＜傍聴者入室＞

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

まず、（1）「有識者からの意見聴取について」でございます。

本日は赤穂市にあります関西福祉大学学長の加藤明様をお招きいたしております。

加藤様は小学校教諭から御活躍の場を大学に移され、ノートルダム清心女子大学や兵庫教育大学大学院等を経て、現在は関西福祉大学で教育や福祉・看護に携わる若者たちの育成に励まれておられます。

御専門は教育方法学・算数科・生活科教育等で、大学でのお仕事の傍ら教科書執筆や中央教育審議会専門委員を務めていらっしゃいます。

ノートルダム清心女子大学時代の教え子の方が多く勤務されている岡山市の教育力の向上のために、有意義なお話をお聞かせいただけるものと存じます。

それでは、加藤先生、よろしく願いいたします。

○加藤学長 皆さん、こんにちは。こういうレイアウトで話すのは初めてなもので。

レジュメを用意していただきましたので、そちらに従ってお話をしたいと思います。

私の話す内容がそれほど岡山市にお役に立つかどうか不安ですが、思っていることを話しますので、とりあえず、きょうはこれに従って説明いたします。

レジュメの一番最後を1枚くっていただきますと、見開きの左上に「大学改革は授業改革・意識変革から」というのがあります。この見開きは、今、大学はFDで、教員の資質向上を図るのが一番の大きな課題になっております。ファカルティ・ディベロップメントです。要は、大学の場合は、具体的には授業評価とシラバス、いわゆる単元計画、それでやっていこうという形になっております。FDの講演会、この前、私が出まして

お話をしました。

例えば校舎をつくり直すとか、あるいは学部の改組とかそういった改革もいろいろあるけども本質は授業改革だろうと。それは教員の意識改革だろうということ、これは義務教育、あるいは高等学校の教育にも通用するものだと思っております。

次のページ、学校はこんなところではないですよということで、学校は退屈を学びに来てるんじゃないのですよ。退屈している学生はいませんかということです。これが小・中学校で言えば、わからないから退屈。わかっているけれども、やってること、なかなか自分よりも、もっと私は背伸びできるのにこの辺でという、待て、待て、待てという感じで、みんな一緒にやっぺいこうということの退屈さと、両方あると思います。

教育制度的には学習指導要領をクリアできれば、後はどういうふうにもどうぞという形に実はなっているんです。教科書の中にも、これはみんながやらなくてもいいというページがあるわけです。本当にいい時代になったと思うんです。これを上手に使え先生は、やはり子どもは伸びると思っております。子どもの力を低く見たらいけないと思っております。もっと背伸びをしたら頑張れるんだけど、このところが、待て、待て、待てと言ってる間に、力がそがれてしまうこともあるんじゃないかなと思っております。そういったこと実は言いたいんです。

1番は、学校は退屈を学びに行くところではないですよ。やはり力をつけないといけなところと、2番は自信を失うところではないですよということがあります。3番目は、大学ですから、一人前の社会人・職業人をどう育てるか、このところを忘れてはいけません。要は4年後の学生の姿で大学が評価されるわけで、教員の指導力が評価されるわけです。出口をしっかりしてくださいよということがあります。

私が授業をずっと見てまいりますと、本学の学生は割方おとなしいです。私、これまで幾つか大学、一番最初は小学校の教諭でしたから、初めは公立小学校におりました。それから14年間、大阪教育大学附属池田小学校で、事件がありました、そこにいて。それから、初めての大学がノートルダム清心女子大学だったんです。その後、京都のノートルダム女子大学へ行って、兵庫教育大学の教職大学院、京都光華女子大学で今に至るわけです。

だから、方々見て回ってますが、その中でもおとなしいです。それでも授業を見ると、自分とこの大学の恥を言うようですが、半分寝てるとか、半分スマホを打ってるとか、それを教員がどうしてしからないんだと言いました。

私、授業を3つ持ってる、各学部に。私はしかりますから、出ていけと言います。出ていけと言うと、最近出ていってしまうんです。昔と違うんです。教職課程の授業ですから、必修です。それでも出ていくんです。出ていかれるとまた困るので、1回だけ許したるから座っとけとなるんです。大学の先生はなかなか教壇を離れない。それは中学校のときもそうですよ、なかなか離れない。回ってみたら、筆箱を見てみたらわかります。鉛筆がちゃんととんがってるのと、くしゃくしゃになっているのと、そういったことがなかなかできない。

そういうことを、苦情を言いますと、この前から私が回ると、廊下側のカーテンが閉まってきましたね。窓側じゃなく廊下側のカーテンが閉まっていました。教授会で、それはだめだと言ったんです。見て回るのも中に入って見て回るからとか、理事長も連れて見て回るからと、見ないとだめです。これは小・中もそうです。見て回らないとだめだと思います。

あとは、一人一人を大事にするとみんな言います。どう大事にするか、授業を見たら一目瞭然です。あそこであの子は答えられなかった。先生がそう言った、あなたがおっしゃる一人一人、そういうことです。別の言い方をすれば、そういういい一人一人を大事にする仕方を若い先生が学ぶべきです。それは本では書いてないです。私も自分の著作はあって、それなりに持ってますが、本で書くとどうしても言葉を選ぶんです、残りますから。なかなか本音は書けないです。見ればわかると思います。

だから、授業の見回りを日常的にしていく、これがとても大事で、保護者に見てもらおうと同業者に見てもらおうのは違うんです。同業者が見ると、いろんなことがわかります。構えないで、ふだん授業を見てくださいなんです。思いは伝わりますから。そういうことがごく普通にできるようになると、恐らく授業が力を、底力がついてくるなと思っております。

右側のページ、最近、私は自分が教育方法論の人間でもありますし、評価畑の人間でもあります。だから、中教審も評価委員と指導要領の委員、それから総則、総則は小・中・高・特別支援学校同じものですが、総則の委員と小学校部会の委員をしております。

そのときいつも言うんですけど、授業は結果で勝負です、プロセスで勝負じゃないんです。教育はプロセスだとおっしゃる方いらっしゃいますけど、プロセスがよくても結果がだめならだめなんです。本当にプロセスがよければ結果もいいはずです。結果を見て、プロセスの改善をしていかななくてはいけないでしょう。ここはとても大事だと思います。

ます。いろいろなとこで指導する中で、例えばある県に行ったときに、私の前に県の指導主事さんが、10年目研修ですから、そこそこのベテランを相手にこういうことを言っておられました。

授業づくりにとって一番大切なことはなんですか。いろいろな自負を、一家言を持っていますから、ある先生は「俺は教材研究だ」とおっしゃいます。ある先生は、「板書計画だ」とおっしゃる。ある方は「発問だ」とおっしゃる。みんな当たってるんです、答えがないんです。その指導主事さんも、答えを自分もなかなか言えませんが一緒に考えていきましょうよねということで終わって、次、私の番で、何か言わないといけないから、私の考えはこうですと、授業づくりにとって一番大切なのは結果ですよ。

要は、子どもが賢くなったかどうか、力がついたかどうか、これだけです。やり方はいろいろあって当然です。これしかないというやり方はないです。先生の得意わざがあるでしょう。我々教員から言うと、上手に教え込む先生もいるし、上手に子どもと話して育てる先生もいる。4月に持った子どもが3月にどう育ってるかで我々評価されるわけですね。だから結果で勝負です。プロセスがよければ結果もいい。

そこで3つ上げてます、まず、①成果は上がっているか。これはとても大事ですね、小・中、特に。思ったほど子どもはわかってないですよ、できてないですよ。本当に賢くなってるんですか、何で言えますかということです。だから、私たちは途中、途中でそっと見ないといけないんですよ。

次、成果が上がってるとしたら、②その成果で十分ですか。例えば、わかる、覚える、できるだけじゃないですかと。要録の観点で言えば、下の2つで知識・理解と技能だけじゃないですかと。その上に見方・考え方、あるいは表現力、それがあるんです。あるいは、一番多いのは関心や態度があるんです。少なくともバランスのとれた学力が必要であって、狭い意味での、わかる・覚える・できるだけだったら、これからの世の中は生きていけない。あるいは、そういった学びの上に育ちがあるわけだから、人間として十分な力が欲しいわけです。あるいは、自学力、みずから学ぶ力が欲しいわけです。

そういったものをつけようとする、一番大事なことは、そういったことがまず目標として掲げられてるかどうかでしょう。目指すものがちゃんとあって、目標があって、それに向かって効果的な指導が積み重ねられて、その結果、ついたかどうかの評価できるのであって、目指してこなかったものをつくわけがないので、学校教育は、それは一番やってはいけないですね。ここのところがとても大事。どこを目指してやってるか

いうことは、授業にとって、とても大事なことです。ちょっとテクニカルな話になりますが、普通小・中の授業を見たら、一番最初にあるのは自力解決があるんです。自分の力で解決する、そこから始まるわけです。

その辺は、4ページ左側の下に、「開く授業、真のアクティブ・ラーニングの実現」があります。2つ目、「目的としての自力解決」とありますが、その話です。

要は、私たちが子どもたちに自力で解決してごらんと言うんだけど、それはその後みんなで学び合うための前段階という位置づけが多いんです。そこは自分の力で解決する場、それを鍛える場、育てる場です。別の言い方をすれば、そういう力をつけてきたかどうかを先生が評価されてる場です。だから、たっぷり考えささないといけないんだけど、よくあるのはちょっと鉛筆を置いてとなるんです。

この前見たのはもう少しひどくて、まだ考えてる途中の人もいるけど鉛筆を置いてとか。考えてる途中のやつがおったら、鉛筆置いたらだめだと思うんです。それなら、もう時間もないので、あと3分しかないけど3分で考えをまとめてごらんとか、何か要るだろうと。そのときに、例えばヒントカードを連発するとか、そういう先生もたくさんいる。だから、自力解決は、実は手段を越えて目的ですよ。

例えば、皆さん読書感想文を書かれたと思いますけども、国語で言うなら、例えば、我々国語の本当に大ベテランの先生は、教材に入る前に初発の感想を書かせるんです。1つも指導の入ってないときに感想を書かせる。初発の感想を書かせると、いろんなことが見えてくるんです。例えば、その子の文章読解力が見えるだとか、指導が入ってないですから。それから文章力が見える。当然語彙力が見える。字の汚さが見える。いろんなことが見れるわけです。

その初発の感想を書かせておいて、それをもとに国語の、例えば10時間の計画を立てるわけです。ごんぎつねを10時間とか。最後に後発の感想を書かせる。当然、後発は高まっています。それで終わりじゃないんです。実はその力、本当に力がついてるんだったら、次の教材のときの初発の感想、ここがねらいになってやってる先生と、そのとき、そのとき違うんです。どこをねらいにして指導を展開していくかという話でしょうね。

私は広島県に広く入っているんです、学力向上に。私が入ったら、必ず入った学校には、10時間なら10時間の単元計画を詳しく目に書いてください。きょうまでに何をやってきて、これから何をしようとしてるのかわかる程度の詳しさに書いてください。さらに、単元の終わりになったときに、どういうテストをするかというテストをつけてください

と言います。

実は、これが学力向上の日常的な一番いい策だと思ってます。始まる前に、10時間なら10時間で、例えば割合、あるいは方程式、まとまりがあります、10時間、20時間。そのまとまりを我々単元と言うんですけど、そのまとまりの終わった後に、このテストができていれば私たちの仕事はしたことになるというバランスのとれた問題をつくってください。これ、なかなかつくれないです。知識・理解は何か、技能は何か、考え方は何かを見るわけです。それが初めつくってあるということは当然ターゲットは見えてるわけですから、指導が変わってくるんです。

1学年で複数のクラスがあったら、これ終わったら、これでいいんだよねという確認があるわけです。残念ながら、いわゆる市販のテストはなかなかここまでカバーし切れてない。市販のテストは通称100点テストと言うんですけど、みんな100点です。これはお金を出して買ってるわけですから、そんな悪い点をつけられない。授業をやってるほうのねらいと評価が、実は裏表の話ですから、対比しないとイケない。それを、ずっと私はよく見させています。

広島のある先生は、国語のとてもお上手な中学の、授業は走れメロスだったんです。当然、そこに単元末のテストがついてるわけです。ちょっと見たら、大体皆さん走れメロスの文章が出てくると思うでしょう。1つも走れメロスの文章は出てこない。文章はみんな重松清です。なぜかと言うと、私は走れメロスを教えてるけども、この力は別の人の文章でも通用する力を目指しているんだと。だから、重松清だと。

国語の教師はいつも迷うところです。走れメロスとして走れメロスのテストをすると、よく聞いてた子はやっぱりいいです。その後、ほかの文章もできるかという話になるでしょう。これは、どこを目指して授業を組んできたかと実はなる。どこにねらいを絞ってるかとかがとても大事なことです。

3つ目、ここがまた弱いです。③その成果を返さないといけません、学習者に。私は日本の教科を、私が中心と言うか、今の指導要領の一番責任者は梶田叡一という私の恩師です。私は、梶田叡一の弟子です。そのときいつも言われたのは、評価の一番大切なことは、成果を学習者に返すことだと。これは絶対そうですね。これは基本的には褒める言葉、あるいは励ます言葉です。

これはモチベーションが上がるんです。わかった、覚えができた、問題が解けた。その上に認められた。しかも、一番大切な存在、一番認めてほしいのは少なくとも担任の

先生ですよ、教科の担任です。その先生が褒めてくれるということは、とても元気が出ることです。褒めたことを改めて文章にして褒め直すのが、実は通知表の所見です。だけど、所見を書けない先生がとても多いです、若い先生は。コピー・アンド・ペーストで行っちゃうとか。所見がちゃんと書けたら保護者も見直しますよ。子どもは何度も見ますよ、うれしいと。

兵庫教育大学のときにサテライトを神戸でやったりします。サテライトの授業を持っておりました。5人いたんです、生徒。昼間先生しながら夜に来ますから、少ないです。その5人ぐらいの中に、神戸大附属特別支援学校の先生がいらっしやいます。私が授業を回るとぱっと出てきて、加藤先生、これは何々先生の得意な部門ですから一言言わせてやってくださいとか、これいい考えをあいつが持ってますからと仕切ってくれるんですよ、上手に。

あるとき、私の本を買ってこられたんです。サインしてくださいと。僕、サインしたんです。そしたら、サインだけでなく言葉を書いてくださいと。厚かましいけど、書いたんです。何々先生は一人一人のいいところを見つけるのが上手、私、随分救われましたと書いたんです。そしたら、しばらくたってお手紙が来たんです。私が書いたその言葉を時々見直しては、1人でにかっとしていますと。こういう通知表が書けるかどうか実は大事で、これは子どもを見る1つの手なんです。

少し余計なことを言いますと、私、いろいろなところに入ってる中で、20年来入っていて、その地域は周りが、例えば県営住宅で生活保護を受けてる家庭も多くて、なかなか経済的にはつらいところですが、いまだかつて小も中も荒れたことがないです。一体、どこに原因があるかです。私が思うのは、その小も中も終業式の後の職員会議の第1案件は、通知表の所見を見せ合うことです。これは、教師の子どもを見る目を養うとでもいいところですね。何がわかるかということ、例えば一学期の通知表なら、去年持ってた子どもを新しい担任がどう見てくれてるかわかります。あるいは兄弟関係がどういう子か。さらには、こんな言葉遣い、語彙はなかった。こんな見方はなかった。やはり子どもを見る目が今みんな弱いんですから、これをともに現職教員が養うんです。やはり、なかなかと思うんです。

というのは、保護者は自分の子どもを縦に見ております。我々は指導要領があるんです。その指導要領の中に所見も書くんですけど、ほんのちょっとしたことです、記述の場所も。でも、ずっと書いておりますから、保護者はずっと見てますから、一学期の通知表

って一番関心持ってます。それは、5、4、3、2とかA、B、Cじゃないんですよ。所見、どう書いているか。それを見て、今度の先生はいい先生だねとか、今回ちょっと外れたとか、1年間我慢せないかなと考えます。また持ち上げられたら大変なことですよ、また同じかと。

でも、それを先生方が見ていたらまずこう言います、個人懇談会で。去年はこれとこれがいいと言われてましたけど、これ頑張ろうと言われてました、それ、私ちゃんと聞いております。これでギャップなんかなくなるんです。中学校の先生が小学校から上がってきた子にそれを言えたらすごいですよ。何々君、6年のときにこれを褒められたよとか。あと、頑張るのこれよと言われてたよとか、今年頑張ってよかったら一緒に言いに行こうとか、それで変わるでしょう。こういったことも実は先生方が元気になりながら保護者との信頼関係、なかなかそういう勉強の機会ってないです。

具体的に前に子どもがおって、私も知ってる子どもがいて、その子どもにこの先生はこういう見方をしてる。私にない見方がある。こういう言葉はない、これはなかなかいいよね。結局は現職教員ですから、中でやるのが一番いいわけで、外の研修よりも。こういうことも1つ考えられると思う。

話を進めますが、いつも申しますのは、指導力もとても大事だけど、それに対応する評価力が要りますよと。指導はどんどんするけど結果は知らないとか、力をつけたはずだとか、育てたはずだということではだめでしょうということが、実は一番にあります。それに対応する評価力をどう持つかということは、まず考えないといけない。

1枚目に戻ってください。一番最初の表です。

「教育における課題解決について」ですが、岡山市も一生懸命、こういうところを何とかしたいということですが。私は、小中一貫教育全国サミット、今年もまたかかわりますけど、いつも言いますのは、成果は上がったんですか。小中一貫教育いいですよ。小中一貫教育をして、しなかったときよりも成果は上がっているんですか。上がってるのなら、その成果を出してください。それは立場の違う人が見ても、確かに成果が上がってるねというエビデンスがいる。そして、うまくいってるなら、こういう取り組みをしたんだから成果が上がったと。この取り組みは皆さんどうですかと、取り組みの共有化を図らないといけないです。あるいはうまくいってなかったら、いろんなことがあってうまくいかなかったんですが、この後、皆さんと一緒に考えてくれませんかと、課題の共有化になる。これがとても弱いです。



私、いろんなところの教育委員会の評価をする係を引き受けておりますが、上手に書いてあるもんだから言いようがないけど、いや、こんなもんじゃないだろうと思います。具体的に例を挙げてくださいとなると、なかなかうまくいかない。

先生方の欲しいのは方策ですよ、方法です。これを委員会が提示しないとだめだと思います。ある県でずっとかかわってて、特に学力テストがありますから、学力テストの結果を持ってきて、委員会で言うわけです。お宅の学校はどうしてこんなに学力が低いんですか、これどうするつもりですか。校長先生が一生懸命答えるわけです。一生懸命答えて、それでも責められ責められて、私に泣きの電話が入ることがあります。悔しいと言って。

でも、それは委員会、下手くそやと思う。お宅の学校はどうしてこんなに低いんですかと聞いたら、校長先生なりにいろいろ言ってきます。方策どうしますか、方策が出てこない。委員会としてお宅の学校をいろいろみんなで考えた結果、お宅の学校はこの学校の取り組みが参考になりますよ、県内で、あるいは県外で。ここへ行ってみてください。一遍、これをもとに自分の学校によせてやってみてください。だめだったら、また一緒に相談に乗りましょうとしないとだめだと思います。方策がうまく言えないと思います。その方策をどこで評価するかという評価の時期と手だて、これもちゃんとやらないといけない。教員はそこがとても弱いところです。今は、それを学力テストという形で実はやってるんです。

私は学力テストをつくる一番最初の委員でもあったんです。皆さん御存じ、もともと何のためにあの学力テストをしたかという、1つは教育行政としての責任を果たすためにしたんです。今は経済格差が学力格差を生んでると、これが1つの仮説になるんです。そうすると、たまたま経済的に高いところに生まれた子どもは調子がいいわけで、そうでない子はなかなかしんどい。これがあつたら困るでしょう。だから、全国悉皆なんです。ことごとく皆やっていくと、弱いところが見える。その弱い地域に予算をつぎ込んで、いい先生をつぎ込んで、少なくともその地域の子どもを平均まで上げないといけない。このためにそれはやったんです。

もう一つは、今アクティブ・ラーニングとかいろんなことが言われております、いわゆるPISA型の学力、思考力、表現力、判断力とか情報の活用力、そういったものがどうしても教育現場は弱かったから、これをB問題という形で出して、これからこういうことが大切だよという世論の誘導、この2つを始めたんです。だから、順位なんか出

すことは一切関係なかったんです。それが1年目のときに、某新聞社が順位をリークしたんですよ。そこで文科省は3カ月出入り差しとめにしたんです、その新聞社を。

次2年目は、どの社もみんなリークしたんです、それが売れるから。みんなで渡れば怖くないです。今はそれが普通になったんです。だから、文科省としては出してないんです。ただ各都道府県で集めてくればざっとできるわけで、こう言われてるだけのことです。

だから、多少はあの結果も考えないといけないですが、あれにあんまり引っ張られることも気をつけないといけない。あれだって、どういうふうに分布しているか大事ですから。今は大体ふたこぶラクダが多いでしょう。ふたこぶラクダが多いとしたら、自分の学校はどういう分布してるか、これを先生方がまず掴んでおかなければいかんでしょう、同じ平均点も分布が違います。平均点が上がったと言っても、上のコブだけが上がってたらどうしようもないわけで、下と両方で動かないかんわけでしょう。方策だって出てくるはずですよ。

でも、学力テストを調子よくしようと思えば、一番は、單元ごとに先生方がテストをつくって、終わった後に誤答の分析をして、ちゃんと教え直しをして、同時にその分析の結果をバトンタッチしていかないかんです。授業改革はそこから始まると思います。またの機会があれば私やりたいと思って、筑波の授業研修で評価のことを1日かかってやります。岡山からも何人か、1人か2人来られてると思います。

どんな小さなテストをしても、必ず誤答の分析をしようよ。例えば、漢字テスト1つでもそうでしょう。漢字のテストをした、返す。返すだけなら、これは通知表の資料取りですから。返した後に、間違ったところを直しておいで。また同じことを間違ってる子どもいるんです。我々いつも言うのは、返したときに、3番が一番間違いが多かったんだよ。このはねるところがはねてない人が多いんだよ、ちょっと見てごらんよねと。はねてない人、手を挙げてごらんとかね。正しい漢字を5回書いてごらんとか。ちゃんと書けるまで責任を持たなあかんでしょう。どんな小さなテストをしても、そういう誤答の分析をする手法は学ばないといけないと思う。

1回、1回ととてもいい授業をしてるのに、その授業は個人のレベルで終わるんです。いい授業をしてるんだったら、いいテストをして、その結果を分析して、どうしてもここが弱いとなったら、これは何時間目の問題だと。今は、ここはこの子たちには補充して直すけど、次この授業する人は、ここを気をつけないといけないよというバトンタッ

チができるわけでしょう。いい授業してるのに、そのデータが伝わらない。このごろお医者さんに行っても、内科に行って外科へ行ったら、データが移ってるでしょう。何で毎日やってる授業の結果が次につながっていかないの、その辺はとても大事です。

皆さん、4年の割り算の筆算って、ちょっと難しいところがあるんです。320割る45とか、三桁割る二桁とか。あれ何が一番厄介かと言うと、引き算の筆算できてない子が多いです。我々、A問題出すんです。要するに、あれは三桁割る二桁だから、初めにこの仮の商を立てないかんでしょう。これが立たないというのは、3年の割り算ができてなかったら立たないです。立ったからと言って、立った仮の商と割る数を掛ける、これは3年の掛け算です。その後、2年の引き算の筆算なわけです。それがずっとネックです。そうすると、2年生のときの引き算で、この子とこの子はこれがなかなかつらかったと。これをうまく越えてるけど、ちょっと見てあげてねということがちゃんとあれば、先生方もそこを見ながらできるでしょう。

別の言い方をすれば、割り算の筆算を教えながら、引き算の筆算の苦手をまとめて面倒見ようという気があるかどうかなんです。基本的に算数科は前のつまずきです。私、教科書も30年ぐらい実は入っているんです、算数科の教科書、生活科と。教科書を書いていつも思うのは、教科書はどうしても商品ですから、前に勉強したことはみんなできているという前提でいくんです。でも、できてないんです。ここは先生の仕事ですね。

これをできるだけそっと見て、そのつけを返しながらか授業が展開できるかどうか、これはとても大事。これ、1人ではできない話です。チームワークです。みんな子どもは賢くなりたいと思って学校に来ているんです。でも、賢くなれないです、前のつまずきがあるから。ここをどうしていこうかということですよ。

話を戻しますが、小中一貫の課題です。要するに、取り組まなかったときよりも成果が上がっているんですかという話は、やはり要るだろうと思う。岡山市の小中一貫がよくわからないので、夏休みに兵庫県の全市の教育長さんの会議で小中一貫の話をしました。3週間ぐらい後に議会の文教委員会で小中一貫の話をしてくれというので、一応引き受けております。

一番のポイントは何かと言うと、簡単に言えば、小中一貫は、原点は6・3制の見直しです。6・3制は、御存じのように戦後アメリカから入ってきた制度です。アメリカも6・3制。それは、それでよかったんです。要は小学校の6年間で終わって、中学校の3年間で思春期です。今はその思春期が下におりてるでしょう。レジュメの2ページ、

上に書いてあります。6・3制の見直しが入ってます。

今は小の6で終わって、中の3年で思春期が来てるんじゃないんです。発達の加速度現象でうんと下がってるんです。だから、小学校4年ぐらいから始まっているでしょう。4、5、6あたりから思春期です。そのころの子どもは、体は大人だけど、心が子どもです。このアンバランスになかなか対応し切れない。しかも、大体家に帰れば自分の部屋を持っていますから、子どもは自分の部屋に入る。そこに親が入ることがなかなかできない。もしかしたら一家団らんというか、食事も時間がばらばらになってることも多い。そうすると、今度は、そのところの5年、6年、中1の通称10歳の壁のあたりでいろいろ問題が、不幸な事件が多いですから、そのところは小中一貫をとるにしろとらないにしろ、先生方が丁寧に見ればいいだけでしょう。この辺を見るには、それなりの臨床的ないろんな人のアドバイスをもらわないといけない、研修もしないといけない。こういったことを大事にしていくとか。あるいは学力差もふえてきますね。そういったことも考えてやったおかげで、うまくいったかどうかという成果も確かめをちゃんとしないといけない。こういったことを大事にしていく。

一貫教育の右のページ、アクティブ・ラーニングが今はやっているんです。右を見ても左を見ても、教育の世界はアクティブ・ラーニングです。もともとアクティブ・ラーニング、1990年代にアメリカの大学の教師の改革から起こったんです。どういうことかと言うと、一方的な講義型で、聞くという講義についていけない学生がたくさん出たんです。話す、書く、表現することを取り入れると、授業が自分たちのものなるんです、活躍できますから。これが主体的、能動的という活動になる。これをアメリカが取り入れたんです。これを日本の文科省が、中教審が、大学の改革の中にそれを言ったんです、これを入れてください。そのときに、アメリカだけじゃなくて、日本の風土に合うように、汎用性のある能力をつける場にやってください。

例えば、発見学習、課題解決学習、あるいは可能性学習、いろんな体験が重要であって、そうやってアクティブな型がいろいろあって、これといった型はないけど、それを通して問題解決する中で、汎用性のある能力をつけてください。それが、これからの大学という答申の中にあっただけです。それを今おろしてきて、義務教育に実はおいてるんです。そして、アクティブ・ラーニングのことが、いろんなところで言われるようになってるんです。

だから、アクティブにのめり込むのはいいんだけど、そこで能力がつかなくなったら

ラーニングにはならないんですよということです。ただ、そこで思考力とか、表現力とか、判断力は、日本の教育は弱いんですよ。PISA型学力の調査を見ても思考力は弱い。岡山市がもっとも大きな思考力が弱いわけです、表現力が弱いわけです。これがつかなくなったら、実は意味がないんですね。

でも、別の言い方をすれば、話す、書く、聞く、読むというのは、実はそれそのものが一番汎用性のある能力のはずです。だから、その力は単にアクティブするだけの手段じゃなくて、それをつけることそのものが実は大きなねらいで、現行の学力指導要領は、これが重点的に置かれているわけです。

私、この前、自分の大学で推薦入試の合格判定の報告を聞いたんです。その中に、サッカー部で来る子に、サッカーをするにあたって大切なリーダーシップは何かと質問を投げて、いろいろ書いてある。書いてることはいいんだけど、文章がおかしいとか、誤字・脱字が多いとか、ふにゃふにゃして読めないとか、これ話にならんだろうとか、そういう学生がとても多いんです、今。

大学は残念ながら、高等学校の教育課程がちゃんとマスターできてない学生が来るんです。さらには、志が弱い、あるいは能力が。本当に一握りの旧帝大系の大学は別にして、それは大学院大学で生き残りますから、それ以外の大学は資格を目指しながら、資格の取得を通して学力をつけて、一人前の社会人にするという使命に今変わりつつあるんです。これはしようがないんです。でも、その中で一番の汎用的な能力は言葉の力です。文章力をつける、語彙力をつける、書く力をつける。

そうなってくると、先ほど初発の感想の話をしましたけども、私たち教員が国語教育を教えるとき、皆さん自分の教わった国語教育を思い出してください。例えば小学校2年生、笠地蔵。あれ6ページぐらい読むんです、教科書を。その気になったら2年生の子ども、1分で読めるんです。1分で読める笠地蔵を、我々はすくなくとも6時間、7時間かけるんです。1人で1分で読めれば、みんなで読んだほうがいろんな見えないことが見えてくるんですよ。これが我々の仕事ですね。

あるところにじいさんとばあさんがありましたと、大層貧乏と書いてあるんです。先生が聞くわけです。大層貧乏と書いてあるけど、どのくらい貧乏。聞かれたら、子どももう一遍読むわけです。そうすると、その日その日をやっと暮らしておりました。そのくらい貧乏とか、お正月がござっしゃるのにモチ米の用意もできんほど、そのくらい貧乏だと。座敷を見回したけど、何にもありません。そのくらい貧乏。言われてみて、初

めて子どもがいろんなことに気がつく。それが国語の教育の腕の見せどころ。

ただし、それが終わって、子どもが課題作文、読書感想文を書いてごらんと言ったら、その読書感想文は100ページ、200ページの本を読んでいるでしょう。100ページ、200ページの本の読み方の指導は少なかったです。だから、本好きにならないのはよくわかる。PISA型のB問題のような、いつまで、どこになったら問いが来るんだろうとか、トレーニングを1つもしてきてないです。長い文章になれさせてやらないといけません。はなから嫌いという子がたくさんいるわけで。そういったことが、ちゃんとねらいの中に入ってるかどうかの話です。

だから、読書を好きな子を育てるのに、もっと本格的にやったらいろんなことができると思います。ただ世の中に出てる本は、少なくとも100ページを超えています。教科書で100ページを超えるような文章ないです。欧米はあるんですよ、欧米は丸本主義ですから。

仙台で、小中一貫の一番うまくいってるウルストラという私立学校があるんです。ここは文科省も国会議員もやってくる。校長さんは、この前、国会の招致で小中一貫教育の話をしてるんです。そこは、私と言語教育の三森ゆりか先生がやってるんですが、三森さんは丸本主義ですから、生徒には200ページの本を渡して、その読み方の指導をする。だから、五、六ページの笠地蔵と100ページ、200ページの本を与えたときの指導は仕方違ってくるでしょう。この辺も我々これから考えていかないといけません。どこにもないですよ、実践例は。岡山市がやるなら本気でやらないといけません話です。

だから、どこを目指して子どもの力をつけようとしているか、今やってるのも大事だけど、この先も考えて指導を組んでるかどうか、そして力がついたかどうかをどうやって確かめるようにしてるか、これが勝負だと思います。

さらに、こここのところに反転学習と書いてます。反転学習って大学生には評判悪いです。これは何かと言うと、例えば米の自由化について。米の自由化の賛成の論文を3つ、反対の論文を3つ読んできなさい。まとめときなさい。次の授業は、初めから是か非から始まるわけです。学生嫌がる。なぜかと言うと、その論文の宿題よりもその読み方がわからない。ここは下手くそです、大学の先生は。

これが小中なら、子どもに言ったりしますから、仮に私が反転学習したら、1回目は米の自由化反対の文章を読んできなさい。授業は、どう読んだとか、読み方はこうですよと指導していくわけです。次の授業は、賛成の文章を出す。どう読んだ。読み方を教

えていかないかんでしょう。目の前の子どもの実体に合わせて、最後力がつけばいいわけだから。

こういった授業構成を考えていく、ちょっとしたらできますよ。だって子どもたちに、A問題は習得で、B問題は活用で、ダブルテストやってるわけだから、先生方は教科書の活用力が欲しいです。教科書はみんなに合うものです。小学校は2万5,000ぐらいある。2万5,000校の小学校に合うようにつくった教科書は、実はどの学校にも合わない。これをどうしていくか、その活用力が本当は欲しいです。本当はクリエイティブな仕事ですから、教育は。読んでいったらわかりますよ。

だから、うちの子にはこれは難しいなと思ったら、もう少しスモールステップ化にしようとか、うちの子はぼんとぶつけて問題解決がいいとか、ちょっと適用題ふやさないかとか。あるいは宿題もそうです。家庭学習もとても大事で、今は授業で勝負の時代ではないです。家庭学習も含めて勝負です。ここもやらないといけない。でも、宿題は残念ながら情けないですよ、宿題を考えてない先生が多いから。終わった後にドリル何ページとか、計算ドリル何ページ。それは授業とどれだけ関連があるんですかの話でしょう。

先ほどの図を見てください。アクティブ・ラーニングの上も下も同じことですが、6番の家庭学習、「すらすらできるへ、考え方をさらに活用して」と書いてますが、私は単元の計画の中に宿題の計画も入れてくれと言います。それは学校の学習とどれだけ関係があるか、星1つ、星2つ、星3つ。私が入る前にやってもらうのは、先生方、子どもたちに出した宿題を1週間一遍出してみてください。どんな宿題を出されましたか、それは子どもの力で実質何分ですか、これは授業とどのくらい関係がありますか、星1つ、星2つ、星3つ。そんなに関係はうまく出てきません。学校でみんなで一題勉強して、それから一題できるかどうかの適用題をして、それもできないうちに終わってしまうことが多い。それから、家に帰ってきちんとした量の学習をしないと力をつかないです。

いろんなところで改善の余地があります。そういうことを通して、最後にまた自力解決できたかどうか。どこを目指してるかと、それから目指したところの評価をちゃんとする。そして授業改善、本人が1人でも授業改善やっていけると思うんです。それをたくさん人間でやっていけば、もっと成果が上がる。この辺をどう考えるかが、授業改革の根本ではないかなと思っています。

あちこち行きましたが、いろいろ御意見を伺いたいと思います。

○司会 以後の議事の進行は、会議の招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしく申し上げます。

○市長 加藤先生、どうもありがとうございました。

今の御説明に対して、御意見などございましたらお願いいたします。

○山脇教育長 加藤先生、ありがとうございました。

先生のお話をお伺いしながら、授業づくりにおいて大切にしないといけないことを、もう一度、自分の頭の中で整理しながら、反復しながら聞かせていただいております。特に、本質が授業改革であると。授業をいかに子どものものにするかを含めてお話をいただいたんではないかなと思っております。

その中で、授業、したことと評価をどうつないでいくかというお話でしたが、評価は学校現場は多分余り得意ではない分野ではないかなと思います。評価はやっているんです。やっていますが、それは評定のための評価をしている。そういうところが多いのではないかなど。

授業を一つ一つやって、学習活動をやって、子どもがそのときにどういう状態になっているか、要は形成的な評価の視点から見て、次にどうつないでいこうか、それを集合として総合して、評定に結びつけていくあたりについて十分できているところがあるのかどうかを、お聞かせ願いながら思っていたんです。

いざ評価を考えたときに、授業の流れの中で、どこでどういう評価をしていこうか、それを次の展開にどう結びつけていこうというのは、大変難しいことだろうと思うんです。そこにしっかり構想力がないといけませんし、評価の詰めがないといけない、評価計画がないといけないことになってこようと思うんです。そのことについて、先生、方法を少し、簡潔なやり方として、こういうことができるんじゃないだろうかなというものがあれば。

もう一点、先ほどのアクティブ・ラーニング。アクティブ・ラーニングも当然大切な、子どもたちが活動していく、ただ活動で終わってはならないわけで、そこで身につけさせていかなければならないような内容はしっかり身につけさせていかないといけないと。したがって、目標は何なのかをしっかりと持たないといけないんだろうなということを、お聞かせ願いながら思ったわけです。全国の学力学習状況B問題は、解決や思考力・判断力をしっかり身につけてないと解けないような問題になってきてい



る。

ところがA問題、A問題がもちろん基礎にないとB問題も解けないんじゃないかなど。B問題もしっかり授業の中で行っていくための、A問題とB問題にかかわるような授業展開という中で、何か、先生、これまでの中で工夫されたようなこと、そういうものがおありでしたら教えていただければと思います。

2点、お願いします。

○加藤学長 まず1点目、岡山市の教育研究会というか、先生方の集まりがありますね。

そのところで、いいテスト問題をつくるのが一番いいと思います。

例えば少数の単元が入る。そこで少数は、このテストができたらいいいんだねとみんなで作ったものが。これは別に、例えばそのまま目標ですから。そのテストの結果をまたどこかに返す、ずっと分析してやる。そうすると、する前にこのテストができたらいいいんだね。でも、この問題が毎回調子が悪い。こうやったらいいよと書いてある。同じところへ落とし穴が、気をつけてやろうねというデータをやればやるだけ集まってくるわけでしょう。そこに教員が集まってくる。

例えばアメリカは、皆さん、普通、教育研究所は放課後に行くんです。放課後に行ったら、教具づくりを全部助けてくれる指導主事が結構いるんです。教具さえよければ、授業したら結構うまくいくんです。そういったことつくる時間がないでしょう。それをどこかちゃんと置いとく。これを一遍やってくれよとか、こういう手助けが1つ。

だから、みんなでいいテスト問題をつくる。つくるのが大変だから。バランスもとれた。これをどこかにアクセスすれば出てくる。そしたら、その中に誤答もずっと例が入ってる、今まで。指導法も、ここ気をつけましょうねというワンポイントは言ってる。それができたら一番。

2つ目の問題ですけど、皆さんで考えてみてください。例えば三角形の面積を教えるときに、三角形の面積はこういう公式ですよというのは、いわゆる習得です。基礎基本な。これを使って、へんちくりんな形の面積を求めましようとなったら、これはB問題、活用です。ただ私たちは、A問題で三角形の面積はこういう公式ですよと言うときにも、本当は活用させてるんです。初めから教え込むなんてしないんです。どうやってこんな面積になるんだねと言ったときに、先生、きのうまで勉強した平行四辺形の半分だからとか。ここでしっかり考える時間をとってるはず。そういう力をつけてるはず。そのときに、これを使って、さらにうまくいくような原因も含めてや

っている。ここも活用。

だから、習得も、活用も、みんな活用ですよ。その思いで先生が指導していくか、力をつけようというねらいを持ってやっているか。あるいは、そのときに、この問題はいいよね。教科書は易し過ぎちゃうところがある。難しいけど、基礎、基本問題だねとか。一味違うなと考え、それが岡山の先生の共有財産になっていくといいと思うんです。そういう教材・教具づくりは、とてもいいと思うんです。紹介する機会があればいつでも、私ICTも結構入ってやっていますので、やりたいと思います。

だから、やる気があれば幾らでもできます。そういう形でやってみてください。

○市長 ほかにございますでしょうか。

○東條教育委員会委員長 大変貴重な話、ありがとうございます。

時間も迫っておりますので、たくさん伺いたいことがあるんですが、2点に絞って伺いたいと思います。資料で11ページの上側のカットで、先生が冒頭から御説明をいただいた内容に関してです。

私、一応臨床心理学の仕事をしておりまして、いろんな症状のある方の支援しています。そうしますと、やっぱりゴールは常に意識しないと、どういう状態になっていただかかをまず最初にセットして、それに向かってそのプロセスを考えるということを行います。ですので、冒頭にあります結果で勝負というところは大変腑に落ちるお話でありまして、ありがとうございます。今いろいろ、ちまたでCMなんかで結果でコミットするというCMが出ておりますので、とてもよくわかるお話でした。

ですが、一方で、学校の現場の先生方は授業のクオリティを非常におっしゃって、結果に関する意識がちょっと薄いかなど、確かに言われてみて、今のお話を伺って少し考えたところがありました。そこで最初の質問です。

先生方が、先生は現場の講義もたくさんおありですので、授業のクオリティと結果を余りつなげて考えられておられない。そういう背景は何だろうかということが第1点です。

もう一つは、評価力がこのカットの中に出てますが、先生方の評価力は、私は一方で教育学部で教員養成をしておりますので、どんなふうにしたらついてくもんなんだろうかというのが、御経験から、こんなふうな活動、こんなふうな授業の見方、あるいは大学での教育の提供の仕方があるんじゃないかという御提言があれば伺いたいと思います。

○加藤学長 小学校の話をしてしまうと、児童、生徒、学生は、こちらが思ったほどわかっていないものだという前提で立ってるかどうかです。できるだけ早く成果を確かめないといけない。それも、テストという機会をなるべく少なくして、いろんな形で確かめられますよね。例えば様子でも確かめられる。あるいはノートを集める。しっかり勉強できてたら、小テストをする。その後、必ず教え直しをする。こういうことをちゃんとしていくことが、私はとても大事かなと思います。

私は、小学校の先生を長いこと、附属にもいましたから、毎年発表会します。きょうはいい授業をしたなと自分でも手応えがあることがあるんです。自分で自分を褒めてやろうとかね。次の時間にテストしたらがっかりです。わかってないんだから、それはそういうもので、そういう顔をしてくれるんですね。ここは気をつけないと。

それから、授業の結果で質の話だけでも、私は考え方を変えたらいいと思う、先生方は。こうやって子どもが一生懸命考えて、試行錯誤して、遠回りして行き着く、この過程が、実はそのまま授業の大事な内容ですよ。昔、我々の世界でプロセサーズコンテンツという言葉があったんです。プロセス、内容としての過程、これも計算づくなんです。うまくいかないときに、ここでどうしたらいいと思う、もうちょっと落ちついて考えてみ、やってみてごらんとか、こうやって一遍やってみよう、こういう経験一遍やったら、あのときのことを思い出すでしょう。

いつも先の結果ばかり、先に行こうという話ではなくして、この過程をくぐることが大事な内容ですよという、そこも計算していくんです。そういうふうにしていって、力をつけていったらいいんです。だから、考える時間をとったとき気をつけないといけないのは、しっかり考えさせて、先生が出ていってまとめて、またノートに自分なりにまとめさせて、わかったかどうか1題すると45分では終わらない。だから思い切って、そういうときは60分使おうと。

小学校はいけます。中学はなかなか教科単位だから難しい。例えばの話、教員の先生がいらっしゃるからわかると思いますけど、小学校は1時間目と2時間目の間のチャイムを鳴らさない。きょうはしっかり考える時間を、この教科は60分やる。そのかわり休憩分30分。いつも一番考えるところは1時間目に持てくるとか。そういうふうにして、45分の枠の中では絶対だめです。それはおわかりですよ。45分やったら、しっかり考えて、この子がどんどん発表したら、どんどんたっちゃうんですよ。それ一番論争で頭が働いてるんですよ、思考力が。

そこも含めていくことで、時間の柔軟性も校長先生の権限でできますから、最後の総計算だけ合えばいいわけですので、そういったとこの柔軟性も考えて、いろいろ工夫されたらどうかなと思います。

○藤原教育委員 全国あちこちをいらっしゃってると思うんで、実例があれば教えてほしいことがあります。

結果に関しては、ちょっと私たちは消極的だったかなという反省はしております。プロセスは大事にして、結果もついてくるもんだと思いながらも、結果至上ではないというのがどこかにあって、遠慮してたかなと今反省してるんです。

さっき、現場についての方法や指導、方策について教育委員会が、行政が責任を持ってもう少ししないといけないというところで、ここが一番、今後の工夫で参考にしたいかなと思うんです。

例えば、今まで教育委員会は、アウトプットは見えやすいことがあって、学力に関してもこういう冊子をつくったとか、こういう提言をしたとか、学校現場も指導をしたとか。ただ、アウトカムについては弱いところがあったと思うんですが、そのあたりでもう少し、先ほどはどうして低いんですかということを、どんどん聞き出したようなこともおっしゃったんですが、もう少し事例があったら教えていただけたらと思います。

○加藤学長 やはり学校の先生がなかなか外へ出ていって見学するのも難しくて、どこへ行ったらいいかもわからないでしょう。そうすると、お宅の学校の、例えばテーマはこれですよと。今だったら、1つは小中一貫でしょう、1つはアクティブ・ラーニング。さらに言えば少人数指導。そういったところで、ずっと幾つか資料を上げてきて、ちゃんとデータを取ってみて、行った人の話も聞いてみて、これはお勧めだよねということをおいして、行った限りはその報告を学校でもらって、1人のものにしないで学校全体の共有財産にしていく。そういうことは、もちろん委員会にも届けてもらう形で、研修そのものも、委員会が私が入りすぎたと思います。物見遊山に行ってもらったら困るんですよ、行った限りは。給料もらって行くわけですから、その分、賢くなって帰ってこいと。子どもをその間、別の人が預かってるわけですから。

先生方が行ったらわかると思います。そういうことを通して、行った財産がみんなの共有財産になっていくようなシステムをどう組むか。行くのは奨励しますが、行っ

た限りは何かもらってこいよということをされたらどうかなと思います。データ集めね。

○市長 何となく教育長からも、藤原さんからも、教育において結果が余り重視されてなかったらしき発言があって、私は素人として非常に驚いてるところもあるんですが。加藤先生というよりも教育委員会にお聞きしたいんですけど、例えば加藤先生がおっしゃった誤答、答案の間違った答えの分析。逆に言うと、正しい答えの分析もあるかもしれませんが、そういう分析は、今の教育委員会ではどのようにやられてるんですか。

○事務局（岡林） 今年度の調査結果を踏まえまして、小学校3教科、中学校3教科、今年度全国調査をやったわけですが、それぞれ指導主事でチームをつくって、岡山市の子どもたちの誤答について、なぜだったのか分析をして、それを改善するための方策について、今とりまとめをしているところです。そこには岡山大学の専門の先生方のアドバイスをいただきながら、学校にお示しできる、何かしらいいものができるのを期待しております。

○市長 岡林さん、今おっしゃったのは、例えば全国の学力調査の結果ですよ。それは、こういう大がかりでやるのは、確かに1つ意味があるんだらうと思うのですが、加藤先生のおっしゃったのは、日々のテストでの誤答の分析とか。

○加藤学長 先生方、一人一人の力。

○市長 ということですよ。

そういった面、日々テストしてるわけでしょう。それらについて、生徒30人なら30人が、こういう正解・誤答の分布だったとなったときに、次にどういう教え方をするのか、こういったところの分析は、どういうことになってるんでしょうか。

○事務局（岡林） 本来それがあってしかるべきだと思います。現行の指導要領になったときに指導と評価の一体化が進められて、自分たちがやった授業に対して、子どもたちがどこまで定着をしたのか。できていないのであれば、定着するために今度どんな手だてをするのかが問われて、進めてはいるんですが、学校現場でそれが十分できているかと言えば、十分ではないと思っています。

○市長 そのあたりが1つの問題かもしれませんね。

○加藤学長 両方いるんですよ、両方ね。

○藤原教育委員 すみません、誤解を招くようなことで。

私も学力学習状況調査をイメージして言っていて、学区があるとか、子どもがいろいろ違うとか、調査の対象になる子が違うとかで、そういう意味でプロセスはとても大事にしてきたんだけど、その結果について、そこまでの責任を負うとか、結果が大事ですよという言い方はしてきてなかったというイメージです。

だから、全てにおいて子どもがわかる授業をしないといけないとか、これだけは最低基準で、もちろん最低基準の教科書があって、学生指導要領があるわけですから、それについては誤解がないように。

○市長 わかりました、失礼しました。

○山脇教育長 先ほど市長さんが言われた、日々の授業場面での評価、結果、それを次の時間内で、その時間内でも評価をしながら繰り返してやっていかないといけない。先ほど言われたものは、それがそれだろうと思うんです。

○加藤学長 ベースですね。

○山脇教育長 それが、指導計画をきちっと持っている、そしてその中で評価計画、ここでこの評価をしてみるとか、評価計画をきちっと持っておかないと、多分そこはできないだろうと思うんです。どんな評価基準を持っていくか、どういう目を、尺度を当てるのかということがないといけないのかなと思いますし、さらに、落ちこんどるところを、その時間内で引き上げてやらないといけない、それが十分これまでできてたのかということとは言えるんじゃないかなと思います。

○市長 いろいろ議論する種がこのほかにもいっぱいあると思うんですけど、きょうの御指摘、非常に参考になりました。ありがとうございました。またいろいろと御指導いただければと思います。

とりあえずよろしいでしょうか。時間の関係もありますので。

では、加藤先生、本当にありがとうございました。

引き続き、ベネッセからお願いいたします。

○ベネッセ（西島） ベネッセコーポレーションの西島でございます。

お時間を頂戴いたしまして、全国学力学習状況調査の結果につきまして、ある観点で分析をしてみましたので、そちらの御報告をさせていただきます。

全体像としては恐らく教育委員会様の中、あるいは市長に対して報告はなされておると思いますので、全体像のことでなく、その観点につきまして、きょうは御報告をさせていただきます。

大きく2つございまして、1つは正答率、無解答率の関係です。もう1つ後半は、学力層による質問紙の状況と題しまして、岡山市の学校、小学校、中学校、それぞれ上位20%程度、下位20%程度の学校で、どのような差があるのか、どういう指導差があってこの結果が出ているのかというあたりを見に行こうということで、大きく2つの分析をさせていただきます。

では、本編5ページをごらんいただければと思います。

まず無解答率の全体の状況で、小学校、中学校あります。小学校は、ほぼ全国と同じ無解答率です。無解答率ですので、空白で出してしまった子どもの率ですので、数が大きい方が余りよくない状況であるとごらんいただければと思います。

一方、中学校は、特に国語B、数学B、理科の中にも活用に関する問題、B的な問題も入ってます。この3つにおいて全国との差が大きくなっております。このあたりに課題があり、無解答のまま出す生徒が多かったということでございます。

そこをもう少し中学校に関して詳しく見ていきたいと思いますが、時間の関係で、7ページをごらんいただければと思います。

先ほど課題がありました国語B、活用に関する問題になります。上の表が平均正答率、全国との差が全体でマイナス3.7、選択式の問題、記述式の問題、それぞれ同様の差があることになります。

右に参考と書いておりますが、同じ岡山市と同様の平均正答率を持つある県、2つを並べております。それらの県については、下に行きまして、無解答率のパーセンテージを見るとほぼ全国と同じです。若干多いですが、ほぼ全国と同じ無解答率で、岡山市とほぼ近い正当率をとっている。

一方、岡山市は無解答率、下の表の真ん中の段を見ていただきますと、特に記述式において非常に大きな全国との開きがあります。全国は5.9%の無解答のところを、ほぼ倍近い無解答であるということになります。つまり無解答のまま出された生徒さんが全国よりも多くいらっしゃる。でも、ある意味考え方次第ですが、それでもA県、B県と同じぐらいの正答率なわけですので、この無解答率が減っていけば、まだまだ伸びると、伸びしろであると見ていくことができるかと思います。

その課題は何かと言うと、やはり最後まで解ききらない、書ききらない、あきらめてしまうところにありますので、気持ちをどう持っていくか、先生方がこの調査に対してどういうふう励んでいこうと持っていくかが大事かと思います。

ここには載せておりませんが、全体の調査の中で解答時間が十分だったかどうかという調査がありまして、無解答率が多いのに解答時間は十分だったと答える生徒が非常に多いです。つまりあきらめて、途中でもういやと自分で切ってしまうと。そんな状況が伺えますので、そこは大きな課題であると思っています。

次の数学等も大体同じような感じになっておりますので、11ページに少しまとめております。

まさに今のお話ですが、現在、失礼ながら岡山市さんは左下、正答率が低く、無解答率も高い状況にあるかと思えます。先ほどほかの県の数字を見ていただきましたが、正答率は岡山市と同じぐらいでも、無解答率はそう低くない集団、これは右下かと思えます。みんな、何かを書こうとする前向きな集団である。右上がどちらも、正答率も高く、無解答率も低い形になりますが、何かに向き合ったときに力を出し切ろうと思っているのが右半分だと思うんです。

岡山市の先ほどの数字を見ると、途中であきらめて、力を出し切ろうという人間力と言いますか、その辺が発揮できてない状態があるかと思えますので、人間を育てる意味でも、何かに向き合ったときに力を出し切ろうよと、そういう基本的な指導も必要なのかなと思っています。これも無解答率のところです。無解答率は前向きに捉えて、伸びしろだと見ていただければと思います。

後半ですが、学力層による質問紙の状況で、15ページに行っていただきますと、どのような分析をしたか簡単にまとめてございます。

先ほども少し申しましたが、小学校81校、中学校37校から、真ん中にありますように、上位、下位と言って恐縮ですが、16校ずつ、中学校が7校ずつを抽出して、その学校間の差を見ました。どのような指導の差があって、このような結果が出ているのかを見ていただくために、上位の質問紙の回答率から下位の質問紙の回答率の引き算をして、表・グラフをつくっております。

まず16ページ、こちらは小学校の児童質問紙、児童の方が回答した質問紙の結果で、上位と下位の差が大きいところが何かを差が大きい順に並べています。ここでいう回答率、比率ですが、選択肢の1「とてもよく」ですとか、「よくやった」「よく行った」とか、そういう力が入ってるところを引っ張ってきてます。肯定している合計を出すと余り差が出ないところもありますが、この学校がよくやっていると自認されているところが、あるいは子どもたちがよくやっていると自分で思っているところが、この数



字として出てきてると見ていただければと思います。

恐らく、これは岡山市様でもかなり力を入れていらっしゃると思いますが、振り返りをきちんとやるですとか、わけとか理由とかをしっかりと押さえるとか、観察・実験やるどころ、この辺は上位の学校さんはしっかりできていますが、裏を返せば、引き算の差があるので下位の学校さんは余りできていない、わかる授業づくりで差があるのかなというのが、この16ページになります。同じことが次の17ページにグラフで示させていただいております。

今、5項目を書きましたが、そこに続く5項目が18ページです。こちら、10項目を挙げて、見やすいように2つに分けましたという書き方でございます。18ページの上位と下位の差が大きいところを見ていただきますと、57番、68番、82番、先ほどの無解答とも関係しますが、全て最後まで書こうと努力したと答えた児童の方の差がこの辺にあらわれてきています。無解答の多いのは、やはり下位校になるかと思うのですが、このあたりの気持ちの育て方も差になって出てきております。

次、20ページになります。

ここでは逆に、上位の学校さん引く下位の学校さんの値がマイナスになってますので、つまり下位の学校さんが数字が大きい項目になります。

こちらは学習時間に関するところが多いですが、下位の学校さんのほうがビデオ、あるいはテレビ、ゲーム、このあたりの数字が大きくなっています。家庭学習のマネジメントがなかなかできてないと言えるかと思います。

続きまして、22ページ、今度は学校質問紙です。校長先生が主に答えられますが、学校質問紙の結果になります。

ここの差、学校数が限られているので、37.5%という差が並んでおりますが、この差を見ていただきましても、特に17番、42番、このあたりは学級づくりにかかわるところで、落ちついた学びの場になってるかということですか、児童学級全員でまとまって何か活動ができてるかというあたりが、最初2つにきています。

それから52番、全国調査の結果に真摯に向き合って、それをよくしていこうという学校としての動きができてるかというあたりにかかわってくるかと思いますが、96番家庭学習、具体的な指導を学校としてしているかとかと言うと、非常に低いです。先ほどのように、テレビ等の家庭での時間の使い方に、このあたりが影響しているかと思いますが、先生方が指導されてるとおりに子どもたちは動いてると、あるいは動い

ていないということかと思えます。

続きまして、今度は24ページ、先ほどの続きになります。

こちらは6.3ですとか、ゼロですとか、非常に数字の小さいものが下位校にあります。礼儀正しいところも非常に低い肯定率でした。やはり学校としての学びの場づくり、あるいは学級づくりのベースが、なかなかできていない学校さんが下位校にあるということかなと思えます。あとは、全国調査です。

あと、24ページの36、39のあたり、探求的な学習ですとか、資料を使った発表ですとか、このあたり、もしかしたら、ちょっとうちの学校の子どもたちには、これはしんどいかなということで取り組みをされていないのかもしれませんが、先ほど加藤先生からあったような、背伸びをさせているのかということを見ると、もっともっとうこういうところにも力を入れていっていいんじゃないかなと感じました。

次、26ページになります。

今度は上位校が下位校を下回ってということになりますので、下位校の学校さんが頑張っているということで、チームティーティングで少人数の指導、細かい指導をされたり、あるいは研修を充実させたりで、先生方は当然努力をされています。努力はされていますが、優先課題が何かということがまだまだ、もしかしたら確定できていない状況なのかなと見ておりました。

先ほどから繰り返しになりますが、やはり学ぶ雰囲気のある学級あつての学力だと思いますので、そういったところの優先順位づけをしっかりとつけていく必要があるかなと思えます。

これは集計した数字で見えておりますが、最終的には一校一校どんな状況にあるのかちゃんと見て、先ほどの加藤先生のお話ではありませんが、ちゃんとその学校でどうしていくのかやっていくことが、恐らく学力向上に最もつながる活動かなと思えます。

続きまして、今度は中学校になります。中学校も考え方は同じです。30ページで、生徒質問紙において上位校が頑張っているところと書いています。裏を返せば、下位校ができていないところになり、30ページでは、最後まで書こうと努力したというところが、やっぱり大きな差になって出てきています。

32ページですが、こちらでも上位校が頑張っているところになります。今回理科がありましたので、理科の観察実験等にかかわるところが、結構上位の差になってあらわれてきています。

続きまして、34ページは、逆に上位校が下位校を下回ったということで、下位校のほうが数字が大きい。小学校と同様にゲームやスマホやテレビが出てきています。ちなみに、例えば11番の質問ですが、ゲームをどれぐらいやってますかということで、4時間以上と答えた子どもが19.6%です。次の12番も、4時間以上スマホをやっているのが17.5%。最後の10番も、4時間以上テレビを見てるのが20.8%。これ恐らく一人で全部はできないので、ほぼほぼ独立した数字なのではないかなと。つまり60%近い子どもが4時間ぐらい家庭でこれらのことをやっているのが、この下位校であるということかなと思います。

なので、家庭学習の指導、この後また出てくるとと思いますが、家庭学習をこうやってやろうというコンセンサスが、先生と生徒の間で恐らくとられていない状態なのかなと思っています。

次、今度は学校質問紙になります。36ページです。

ここは小学校よりもかなり厳しい差が出ておりまして、私語は少ない、落ちついているとか、4つ目18番の礼儀正しいのあたりは非常に低い肯定率です。下位校7校の校長先生は、みんな、うちの学校は私語が少なく、落ちついていると思っていられない状態で、非常に厳しい数字だと思います。このあたりの学級づくりと言いますか、学ぶ場づくりがやはりベースにならないと、なかなか学力向上には向かえないんだらうなと思います。

次の38ページがその続きのものになりまして、ここでも小学校と同じような関係にあります。全国調査を真摯に受けとめてるかどうか、このあたりの数字で出てきてるところだと思います。

次、今度は40ページになります。

学校質問紙で、下位の学校が頑張っているところで、やはり中学校でも教員研修は頑張っていられる。下位校がより頑張ってもらえるところになります。

それ以外にも42ページで、下位校が頑張ってる。いろんなこと頑張ってるのが、ずらっと並んでおります。下位校が頑張っている状態が、見える項目がたくさんあるんですが、やはり何をしたらいいのか非常にばらばらしている感じです。やはりベースである学校は学ぶ場であることをしっかりつくった上で、この子たちに何をするのかをきちんと考えながら動かないと。いろんな努力はされているんですが、ベクトルがあちこち向いてるような感触を受けました。

このような学校の差で見させていただきました。45ページに、小・中合わせて、こんな観点で考えていかなければいけないだろうなというのを、今、差異があったところ等を含めてまとめた5項目がございます。

層別に見ていったんですが、やはり学校、一校一校課題は違うわけですので、学力的に厳しい学校さんを対象にした何らかの動きがどうしても必要だと思います。市全体としての事業、何かをやることももちろん必要だと思うのですが、個別の学校をどうやっていくかが非常に大きな課題だと思いますので、個別の学校改革、あるいは授業改革を推進する体制、人をどういうふうにつくっていくかが大きなポイントだと思っております。

駆け足になりました。申しわけありません、以上でございます。

○市長 驚くべき現状を教えてくださいまして、ありがとうございます。また、ポジティブな見解も入れていただきまして、ありがとうございます。

時間がほとんどなくなりましたが、何かベネッセにお聞きしたいことがあれば、お願いしたいと思います。

塩田さん、お願いします。

○塩田教育委員 外れるかもしれませんが、アクティブ・ラーニングという言葉が結構一人歩きをしているみたいで、現場はどう捉えているのか心配になっています。きょう加藤先生のお話を聞いて、アクティブ・ラーニングは、今、実際にちゃんと授業中にやられていることも結構あるんじゃないかと思いました。捉え方は何でもいいのかと思ったんですが、そんな中で今ベネッセのお話を伺って、やっぱり下位校の先生方は今混乱されているというか、何をすればいいのかということが、もしかしたら迷われているのかなと思ったんですが。

質問紙を見させていただいていると、結構アクティブ・ラーニングに通じる質問紙もあるのかなと思ったんです。だから、まずはこういった質問紙というか、これをやっていますか、これをやっていますかという問いかけに対して、それがアクティブ・ラーニングに通じるような質問紙に答えていくという形で何らかの改善が見られるんじゃないかなと、ちょっと今思ったんです。

○ベネッセ（西島） 昨年度から質問紙が大分大きく変わりました、文部科学省さんの方もアクティブ・ラーニングを意識したとおっしゃっていますので、おっしゃるとおりです。

学校を個別に見ていかなければいけないのも、まさにそのところで、どんな活動をされてるかをきちんとひもといた上でどうしていくかを、先ほどの加藤先生のお話のように個別に指導主事の方、あるいは同等の方とお話ができれば学校が発展していくだろうなと思っております。

○市長 では、きょうはここで終わりたいと思いますが、ベネッセの資料は、非常に岡山市の現状を赤裸々にあらわしている資料ではないのかなと思っております。教育委員会でも、これを分析していただいて、今、岡林さんも、全国学力調査の議論を整理されてるところだと伺っておりますが、今後どう生かしていくのか、ぜひ、またこのメンバーでも議論させていただければと思います。

あと、司会に返します。

○司会 次回の会議は年内に開催をしたいと考えておりまして、日程等につきましては、改めて通知をさせていただこうと思います。

以上で、平成27年度第5回岡山市総合教育会議を閉会いたします。お疲れさまでした。